

2024.6
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま
富 薬

6号

第46巻
No.419



モクゲンジ *Koelreuteria paniculata* Laxm.

(ムクロジ科 *Sapindaceae*)

生薬 ランカ（欒華） 初夏（6－7月）に花を摘み取る。

成分 クマリン：acetyl-umbelliferone, benzoyl-umbelliferone、ステロール、サポニン、タンニン等。

効能 中国では目の痛み、流涙に用いる。目の腫れを消す。黄色の染料として使用する。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国及および朝鮮半島原産で我国でも本州の日本海側、宮城県、長野県などに野生化する高さは10mほどになる落葉高木で、樹皮は灰褐色。葉は互生し長さ25-35cmの羽状複葉または2回羽状複葉で小葉は3-7対、紙質で卵形、縁は不ぞろいの粗い鋸歯状または全裂します。7-8月、枝先に長さ15-40cmの大形の円錐花序を頂生し、黄色の径1cmほどの小さな花を多数咲かせます。golden rain treeの英名がついている由縁です。果実はさく果で長さ4-5cmの三角状卵形で、先端は尖ります。果皮は洋紙質で風船のようにふくれ、10月頃に熟します。種子は直径約7mmほどで黒色で硬く、この種子を連ねて数珠を作ったことから中国や日本では仏教と関わりが深く、多くのお寺に植栽されています。同じく球形の黒くて硬い種子が実る同科のムクロジ（無患子*Sapindus mukorossi*）も数珠の材料に使います。

数珠の記載は古く、東晋時代（317-420）に成立したと言われ、数珠の起源としてよく語られる経典『木槵子経』に記されています。その内容はお釈迦様が古代インド・灘陀国の波瑠璃王に数珠を持つことの功德を説くもので、木槵子108個を貫いた数珠を常に身につけ、仏法僧の三宝を称賛するごとに実を一個繰り、これを百万遍繰り返せば、108の煩惱を滅し、涅槃に到達すると説いています。モクゲンジの漢名「木欒子」が誤用され、「木患子」から「無患子」になったという説もあり、両者は混同されることがよくあります。ムクロジの種子は直径が14mmほどで手ごろな大きさのため、よく用いられる種子はムクロジであったとも考えられています。他に同属植物として中国および朝鮮半島南部が原産の落葉高木で、樹高20mほどになるオオモクゲンジ（*K.bipinnata*）や、樹高10-15mになる落葉高木で、果実の果皮は桃色をしているタイワンモクゲンジ（*K.henryi*）などがあります。

中国では『神農本草経』（2C-3C）に「欒華」の名で「味は苦、寒。川谷に生ず。目痛、泣出、傷眥を治す。目腫を消す」と、花を目薬に使っています。『名医別録』（502-536）では「欒華、毒無し、漢中川谷に生ず。五月に採る」と、そして、『新修本草』（659）には「五月、六月に花を取取めるがよし。南方地方ではこれで黄を染めるが、甚だ鮮明である。又、目赤爛を療するに用いる」と言っています。『救荒本草』（1406）には「救飢、嫩芽、葉採り、燂き熟し、水を換え浸して淘淨し、油塩に調食う」と飢饉時の食料とする記載もあります。

我国における記録は『本草綱目啓蒙』（1803）に「欒樹は世にモクゲンジと呼びて、河内・道明寺の名産なり。然れどもモクゲンジは木槵子の轉音なれば、此の木に名くるは非なり。道明寺は河内国志紀郡にあり。三十四代推古天皇（554-628）の勅願にて聖徳太子（574-622）の開基と云う。其の土地を土師里と云う。土師しの連八島と云う人に命じて、この寺を建立せらるこの時に五部の大乘經を埋めたる上に欒樹、自然に生ずると縁起に云えり。この種を諸国の寺に栽たる者多し」と、仏教伝来（538）とほぼ同時期の古墳時代末期にモクゲンジも渡来したと語られています。『本草和名』（918）は「欒華 和名牟久禮之」とムクロジともとれる名が付けられ、『倭名類聚抄』（931-937）には「欒 無久禮迺之乃木」とモクゲンジに近い音が名付けられています。

薬としての記載はわずかで『和漢三才』（1713）に「目痛腫を治す。黄連と合わせて作れば目赤爛を療す」と『神農本草経』や『新修本草』から引用した効能が示されているだけですから、実際に用いられていたかは分かりません。（村上守一 記）